藝文京

Kyoto Arts and Culture Foundation

京都市芸術文化情報誌

特集

都市・文化

「世界文化自由都市宣言」から40年②

対談「都市と百貨店」ほか

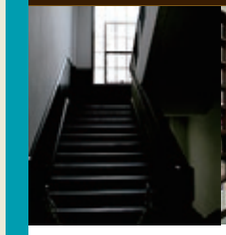
2018. 春

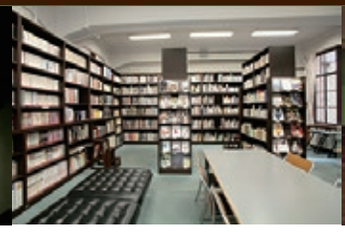
通巻 135 号

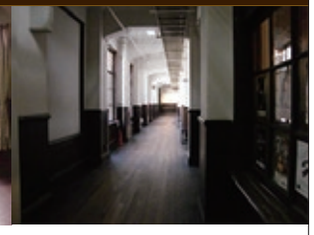
公益財団法人京都市芸術文化協会

京都市芸術文化情報誌 藝文京 二〇一八・春（一三五号）
公益財団法人京都市芸術文化協会

撮影：神崎順一



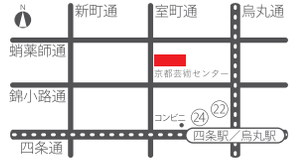




KYOTO ART CENTER

京 都 芸 術 セ ン タ ー

京都芸術センターは、展覧会や茶会、伝統芸能・音楽・演劇・ダンスなどの舞台公演や
さまざまなワークショップ、芸術家・芸術関係者の発掘、育成や伝統芸能の継承、
創造を目指す先駆的な事業のほか、制作や練習の場である「制作室」の提供、
アーティスト・イン・レジデンス・プログラムでの国内外の芸術家の支援などを実施し、
新しい世紀の都市文化の創造拠点となることをめざしています。



京都芸術センター
〒604-8156
京都市中京区室町蛸薬師下る山伏山町546-2
TEL：075-213-1000　FAX：075-213-1004
E-mail：info@kac.or.jp
http://www.kac.or.jp/

地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」
22 番・24 番出口より徒歩 5 分。
駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

公益財団法人京都市芸術文化協会は、京都芸術センターを管理・運営しています。

KYOTO ART CENTER 京都芸術センター

ギャラリー・図書室　10:00-20:00
事務室・制作室　10:00-22:00

［表紙解説］

上：1912年築、インド・サラセン式の大丸京都店
（1913年の祇園祭時に撮影／四条高倉）
写真提供：J・フロントリテイリング史料館

下：1912年築の髙島屋京都本店（烏丸松原）

ランドマークとしてまちの景観をつくり、暮らしや文化のトレンドを牽引してきた百貨店は、私たちの生活と共に歴史を歩み、現在も都市のシンボルとして親しまれています。

題字：秋山公道

京都市芸術文化協会とは

芸術文化に関する調査研究、創造的活動の助成、各種文化事業の実施等を通じて京都市における芸術文化の発展に寄与することを目的として活動しています。併せて「京都芸術センター」の管理運営を行い、様々な芸術活動の支援を行っています。

機関誌『藝文京』第一三五号
二〇一八年三月発行
発行：公益財団法人京都市芸術文化協会
〒六〇四―八一五六
京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町
五四六―二
京都芸術センター内
電話：〇七五―二一三―一〇〇三
ファックス：〇七五―二一三―一〇〇四
デザイン：大向デザイン事務所

回告予次

特集：京都の近代

二〇一八年秋　発行予定

藝文京

Kyoto Arts and Culture Foundation

京都市芸術文化情報誌
2018. 03
通巻135号

目次

〈特集〉都市・文化

特別寄稿①「都と鄙」 鷲田 清一 … 3

特別寄稿②「世界文化自由都市宣言40周年に寄せて
～京都のまちに息づく文化都市のDNA～」 門川 大作 … 6

特別寄稿③「世界文化自由都市宣言について―構想発表から宣言に至るまで―」 北田 貞雄 … 10

対談 「都市と百貨店―生活のデザインと文化―」
井口 昌也（大丸松坂屋百貨店）×米田 庄太郎（髙島屋） 聞き手：辻 喜代治 … 14

〈芸文協事業紹介〉

「京の文化絵巻2017～文学吟詠舞劇と邦楽の飛翔～」 名古 きよえ … 22

〈作品紹介〉

詩 「花道」 白川 淑 … 24

詩 「京都の日々」 岩井 洋 … 25

〈リレー随想〉

「岩田晋次氏を偲んで」 廣 青龍 … 26

〈京都芸術センタートピックス〉

「建築Symposion―日独仏の若手建築家による」… 28

〈活動報告〉

短歌 奉祝 御在位30周年記念「重陽節会」 西島 真森 … 30

俳句 「京都俳句作家協会創立60周年記念祝賀会」京都俳句作家協会 … 31

都市と文化

この一年間、「文化と都市」をテーマとしてきた機関誌『藝文京』は今回、都市を中心に市民の文化・生活を取り上げます。そして四〇年前に出された「世界文化自由都市宣言」の当時の時代を振り返り、これからの京都のあり方を考えます。

今年二〇一八年は、明治時代が始まって一五〇年になります。文明開化の時代がスタートし、それ以降、日本は国を挙げて近代化・殖産興業の政策に突き進んでいきます。その方法として海外での万国博覧会に積極的に参加、また国内においても数多くの博覧会が、各地で開催されました。そうした中で登場してくる百貨店は、近代化の原動力となり、一般の人々の暮らしを大きく支えてきました。そして都市の文化を形成し、現在の生活スタイルを生み出していきます。

特別寄稿①

都と鄙（ひな）

鷲田 清一（哲学者）

京都は人口からすれば立派な都市なのに、都市、あるいは都会という感じがしない。「町」と書いても「街」と書いてもいいが、いまも「まち」という表現がぴったりくる。

高層ビルがないから、あるいは町内や学区という観念が、薄れこそすれまだ地域での暮らしのなかではたらいているからだろうか。それもあろうが、いま一つ、暮らしの襞のなかに、「鄙」もしくは田舎が深く入り込んでいるということがあるのではないかとおもう。

わたしの家もそうだが、まち中の木造住宅にはいまもさまざまな小動物が棲息する。さすがに蝙蝠（こうもり）は姿を消したが、蛇が、いたちが、鼠が、やもりが、野鳥が、人の眼を盗むようにして出没する。虻やむかでから蚊や蝿まで、虫もいっぱい。天井裏では蛇がいざる音、鼠が走る音、そして蛇に押さえ込まれた鼠のいまにもこと切れんばかりの声が聞こえもする。杉本秀太郎さんの秀逸な言い回しを借りれば、「京格子の、取り澄ました家々が、ちいさく飼いならされたいなかをふところ深くに秘めている」。

いまいちど杉本さんの言い回しを引かせてもらえば、その一方で、「碁盤目の規矩よくととのったこの町を出はずれると、忽ちにしていなかがはじまる」。加茂に、嵯峨に、九条に、上鳥羽にと、宅地の向こうすぐに野菜畠が広がり、さらにその向こうには山々が控えており、クルマでものの二〇分も行けば、鬱蒼とした樹林に囲まれる。渓流が聞こえる。それに、いまはほとんど姿を見かけないが、ついこのあいだまで、白川から、大原から、高雄から、物売り女が、日毎まち中に通ってきていた。

かつて「地方」は「中央」の対語ではなく、ぢかたとして「町方（まちかた）」の対語であった。農産の地と工業・商業の地という、都鄙の循環的な関係がそこにはあった。京都でもその都鄙が「縦糸と緯糸のように交わりあって」いた。そう、「町方」に「地方（ぢかた）」が入れ子のように組み込まれていた。その名残がいまも京都にはある。だから「まち」なのである。

「まち」が「都市」となるというのは、その「鄙」が駆逐されることである。「まち」の外へと追いやられることである。土のついた野菜は、洗浄され、整った形のものだけが透明ラップに包まれてスーパーマーケットやコンビニ

の棚に並べられる。人糞は下肥えとして農家の人に汲み上げられるのではなく、下水道に流される。もはやだれも他人のそれを目にしない。「衛生」という名の下に、小動物や虫たちがさまざまの薬品を使ってつぶさに駆除される……。

そのプロセスに普通の人は介入しない。そのプロセスは、行政が、民間企業が担う。人はそのサーヴィスに税金を、サーヴィス料を支払う。そして出来合いのものを消費するのである。そのようにして《消費》が人びとの暮らしの基本的なかたちになる。

便利で安楽である。が、それは人びとがもはや生産や手入れ・手直しのプロセスから撤退するということである。他の生きものたちとの関係が間接的なものになり、じぶんの暮らしをみずからの手で組み立てる力を忘れてゆく。

そういう都市生活の危うさを「都会人」たちにいやというほど思い知らせたのが、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故だった。交通が麻痺し、帰宅が困難になった。流通が停止し、食材や飲料の入手が困難になった。家が壊れてもその手で修復するのも難しかっただろう。技術を、そして何より資材を欠いていたから。じぶんでじぶんの生活を支えられない、そういう脆さが都市生活にはある。京都もこの点ではかなり心許なくなっている。

そんな暮らしをくり返すなかで、人びとの身体そのものもしだいに萎縮し、かじかみ、無能になってゆく。そして、鄙の声が、触感が、じぶんのなかから消えてゆく。宮城出身の若き歴史社会学者、山内明美が指摘するように、かつて冷害や干ばつでたえず飢饉の不安に苛まれてきた東北では、土に雨水がしみ込むことをじぶんの体が「福々しく」膨らむことと感じる、そうした土や海と人とのつながり、魚や野菜や穀物と人とのつらなりが、人びとのあいだで分かち持たれていた。だが、原発事故後に彼女がまっ先に感じたのは、「いま起きている土と海の汚染が、自分のからだの一部で起こっているということを誰も語らないこと」であった。みんな「遠くの災いみたいに話をしている」。

そのような違和感がとくに若い人たちに共有されているのだろうか、彼らのなかで、暮らしのなかに入ってくる鄙ではなくて、鄙に出かけ、そのなかで暮らそうという人びとが増えている。Uターンや Iターンとよばれる地方移住のかたちで、あるいは新しい仕事場や住まいのかたち（シェアオフィス、シェアハウスなど）で。萎縮した身体、そしてみずからの手では制御不能になってしまった都市生活、そこからの揺り戻しの一つとしてこういうことが試みられているのだろう。

わたしがこのところ目を離せなく思っているのは、さらに切迫した揺り戻しの活動である。他の文章でもふれたことがあるが、わたしの知るかぎり数名の女性美術家が、東日本大震災のあと、猟の場、つまり食う／食われるという、生存の可能性の原点となる位相に身を置きはじめた。山に潜む獣たちを撃つ猟師に同行し、仕留めた獣を解体し、肉や内臓をいただき、革をなめし、骨を土に返すという作業の場に。

猟に臨む彼女ら美術家の一人、鴻池朋子はその著『どうぶつのことば』（二〇一六年）のなかで、あの惨禍を前にして、それまで取り組んできた〈芸術〉をもはや「自由」や「自己表現」といった悠長なことばでは語りえなくなったと言う。〈芸術〉の現在を、知らぬまに「仮死状態」になっていた〈動物〉としてのじぶんと切り離せなくなった、と。そして、食うか食われるかの〈動物〉の世界にじぶんも〈動物〉としてじかにつながっているという、そうした連続のなかにこそアートの立ち上がる場所があると思った、と。

彼女は、猟のさなか、猟師の顔がときに動物のそれに見えることに衝撃を受ける。猟師たちは獲物たちがみずから罠にかかりにやって来てくれたかのように話す。それは「まるでどこかの位相で猟師と動物が事前に連絡を取り合っているかのよう」だったというのだ。とっさにこうした感覚をおぼえたのは、ひょっとして、みずからが《産む性》の側にいたこともあるのだろうか。《狩る性》が人のいのちを自然のなかの他の生きものたちのそれから切り離すとすれば、その切断された二つを繕い、ふたたび繋ぎなおす、そのきっかけとなるものをすばやく察知したのだった。

何かを産むことをせずに《消費》に流されるばかりの生活。その脆さ、危うさを思い知った人たちには、もう社会のシステムにぶら下がりっぱなしでいるのではなく、じぶんたちがやらないと、動かないと、どうにもならないという切迫感が漂っている。だからこそ「手仕事」にこだわりだしている。手ざわり、手がかり、手ごたえというかたちで体感できるものにこだわりだしている。

アートにみられるこの動きは、鄙を懐深く隠し内蔵していたかつての都の暮らしにどこか響きあうところがある。町方と有機的に繋がっていたかつての地方のまさにその地力を思い起こさせるところがある。アートが時代の微かな異変を感知し、表現するいとなみであるとすれば、いまアートを語るときにこのラインを外すことはおそらくできないであろう。

鷲田清一　一九四九年京都市生まれ。哲学者。主な著書に、『現象学の視線』『モードの迷宮』（サントリー学芸賞）、『「聴く」ことの力』（桑原武夫学芸賞）、『「ぐずぐず」の理由』（読売文学賞）、『京都の平熱』など。京都市立芸術大学理事長・学長、せんだいメディアテーク館長。

特別寄稿②

世界文化自由都市宣言四〇周年に寄せて
～京都のまちに息づく文化都市のDNA～

門川 大作（京都市長）

1．都市は、理想を必要とする

「都市は、理想を必要とする。その理想が世界の現状の正しい認識と自己の伝統の深い省察の上に立ち、市民がその実現に努力するならば、その都市は世界史に大きな役割を果たすであろう。われわれは、ここにわが京都を世界文化自由都市と宣言する。」

昭和五三年、京都市の都市理念として掲げたこの宣言は、文化による世界平和の実現を希求した、高邁かつ普遍的な内容であり、時を超えて読む者の心に響く奥深い言葉の力を湛えた、まさに我が国を代表する文化都市、学術都市である京都ならではの世界に誇る「都市の哲学」です。

四〇年前、京都市は市会の議決を得て世界文化自由都市を宣言。以来、宣言をあらゆる政策の最上位の都市理念とし、この理念の下に京都市基本構想、京都市基本計画を策定して、文化を基軸とした都市経営を進めてきました。この間、宣言の理念は、世界一一五都市が加盟する世界歴史都市連盟及び会議の創設、国際交流会館や京都コンサートホールの建設、さらには国際日本文化研究センター（「日文研」）や外国の文化センター等の誘致・創設、世界中の宗教者が集う比叡山宗教サミットの開催など、市政の枠を超えて関係者の御尽力のもと幅広く具現化してきました。

そして、そうした宣言の理念を追求し、文化を基軸としたまちづくりがオール京都で積み重ねられてきたからこそ、この度の、文化庁の京都への全面的移転の政府の御英断につながったものと評価されています。

この世界文化自由都市宣言の経緯等については、機関誌『藝文京』の前号（第一三四号）でも触れられているように「京都市において戦後いち早く文化行政の方向性が示されたことや、高山義三市長時代の文化行政が礎」となり、さらにその後、桝本頼兼市長時代に、国家戦略としての京都創生の取組を進め、文化・教育、景観、観光等を市政の柱とされたこと等が、今日へとつながっていると思います。

しかし同時に、宣言の理念は、四〇年前、あるいはその数十年前の時代に、新しく考え出されたようなものではなく、いわば京都のまちのDNAに刻まれたものとして、歴史的に京都のまちづくりの根底にゆるぎなく息づいてきたと、私は考えています。

以下、その観点から京都の歴史＝京都に息づくDNAの軌跡を辿ってみたいと思います。

2．明治期の危機に、人づくりと文化で未来を展望

今から一五〇年前、我が国が明治に改元し、近代国家への歩みを進め始めた一方で、京都は遷都宣言もないまま、事実上都の地位を失い、人口が約三四万人から二三万人へと、三分の一が激減する深刻な人口減少と都市存亡の危機に直面しました。この状況の中、私たちの先人が最初に着手したのが小学校の建設でした。「子どもさえ立派に育てれば未来は明るい」と、まだ文部省のない時代に、京都の町衆は地域で力を合わせ、子どものあるなしに関わらず、家の中のかまどの数に応じて資金も出し合って、明治二年に全国初となる六四の地域制の小学校・番組小学校を創設・運営。京都のまちづくりや文化の未来の担い手の育成に力を注ぎました。

同時に、文化芸術の振興に京都の未来を展望し、日本初となる芸術大学や工業高校の基礎も築きました。明治十三年の画学校（現・市立銅駝美術工芸高校、市立芸術大学）、明治十九年の京都染工講習所（元・市立洛陽工業高校、その分校から発足した元・伏見工業高校、現・市立京都工学院高校）の開校等は、今日に続く文化都市・京都の発展の礎となりました。

また、この時期、フランス革命期のパリで始められた「博覧会」に着想を得て、明治四年、国内・世界の文化やものづくりに触れ、知識と刺激を得て都市の復興・活性化を図る、日本で初めての博覧会が、西本願寺などで開催され、都をどりも始まりました。

さらに、西陣織や清水焼などにおいて、明治維新で有力な顧客を失う危機の中、海外の技術を積極的に取り入れるなど、世界に目を向けて新たな挑戦を進め、未来を切り拓く取組も進められました。

このように都市存亡の危機に際し、「人づくり」や「文化の振興」を中心に据えつつ、世界を視野に、新たな技術や知識、文化を広く受け入れ、融合と新たな創造に挑み、都市の再生と活性化を図るまちづくりの大きな潮流を、一五〇年前の明治期の京都に見ることができます。

3．日本の歴史の岐路、そのとき京都は

さらに歴史をさかのぼり、一一八五年。万葉学者の中西進先生は、この年が「日本の歴史の最大の転換点である」と言われています。中西先生によれば、平家が壇ノ浦で敗れたこの年が岐路となり、ここから日本は貴族政治から武家政治に転換。武家政治の中心は鎌倉、その後、江戸へと移りました。一方、京都には天皇がおられ、文化芸術、学問、宗教、ものづくり、ものがたりづくりの中心として、実質的な文化首都の役割を担うようになりました。

日本の進むべき道が混迷した歴史の岐路に際して、「政治の中心」と「文化の中心」を実質的に分ける仕組みが形成され、これによって京都は、文化を基軸として幾多の都市の危機を乗り越えてきました。そのことが今日、京都が、百万人を超える大都市で、千年以上も都市の機能や文化が一度も遮断されることなく脈々と持続・発展し続ける、世界でもまれな都市と言われることにつながっています。

4．一二〇〇年を超えて受け継がれてきた京都のＤＮＡ

より根源的に「世界文化自由都市のＤＮＡ」をたどれば、その源泉は京都の都市の始まりにさかのぼると考えます。

七九四年、桓武天皇はここ京都の地に遷都することを決意し、都の造営を始めましたが、それ以前からこの地で高度な技術や文化を持って地域（太秦等）の発展に寄与するとともに、新都建設に当たってこれに協力・貢献したとされるのが、海外から渡来した秦氏でした。

また、京都に都が造られる以前は、長岡京や藤原京など、都の名に地名等を冠するのが一般的でした。しかし、京都は、この世の「平和、安心、安寧」を願って、都に「平安」の名を刻みました。

そして、その平安京は、中国の長安を一つのモデルにしてまちが造られました。ただし、大きな違いがありました。中国の都市は城壁で囲まれていました。パリやロンドンもかつては城壁と城門で外部から区切られていました。しかし、平安京に城壁はありませんでした。羅城門はありましたが、鍵で閉ざされた門ではなく外に開かれていました。

すなわち京都は、古来、世界から外部の人・文化・技術を受け入れ、独自の文化を創造し続け、「平和、安心、安寧」を基本コンセプトにまちを造り、常に外（世界）に開かれ、千年を超えて国内外から人々が集い、内と外の交流、伝統と最先端の融合を重ねながら、知恵と力を合わせてまちをゆるぎなく持続・発展させてきた文化都市です。

「世界文化自由都市とは、全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流を行う都市をいうのである。」（世界文化自由都市宣言の一節）

京都は、実質上一二〇〇年以上前から世界文化自由都市であった。そう言っても過言ではないといえるでしょう。

京都では、昨年、世界十七都市が参画する東アジア文化都市サミットを開催するなど、世界文化自由都市宣言に掲げた「永久に新しい文化都市」に向け、更なる飛躍の機運が大きく高まっています。

一方、世界各地で紛争やテロが絶えず、格差、環境破壊も深刻です。我が国周辺でも国際的な対立、不調和、緊張が高まっています。このような状況の中、この世界文化自由都市宣言の理念・哲学を、そして、「文化が最高の安全保障である」とのメッセージを、国内外に発信し、共有することの重要性が高まっていると痛感します。

今年、世界文化自由都市宣言四〇周年を迎えます。文化庁の全面的な移転が決定した京都としての市民ぐるみの準備も含めて節目の年です。この機に、文化都市・京都の発展、さらには文化によって日本全国を元気にし、世界平和への貢献につながる取組を、市民の皆様と共にしっかりと進めていく決意です。

特別寄稿③

「世界文化自由都市宣言」について
――構想発表から宣言に至るまで――

北田 貞雄

世界文化自由都市宣言が行われてから四〇年が経ったが、四〇年前、宣言に至るまでの作業に携わった者として、当時の記憶と資料をもとに、その経過を振り返ってみることとしたい。

市長の初夢

世界文化自由都市宣言の構想は、当時の舩橋求己市長の「初夢」として、一九七八年一月一日付の京都新聞朝刊の一面トップに掲載されたもので、その趣旨は「豊かな文化遺産を基礎にして、京都を世界の人々が学問、芸術、文化を自由に交流する場にしよう」というものであった。

この宣言に至るまでの事務は、各部局にまたがる横断的な施策や市長の特命事項を所轄する総務局調査課が担当することになり、私はその年の四月に同課主幹に発令され、以降、宣言に向けて事務を担当することになった。

まず四月以降、数回の内部会議を開き、①宣言は十月十五日の自治記念日に行う。②構想の「趣意書」をつくる。③宣言について検討するため、学識経験者等で構成する「推進懇談会」を設ける。ことなどが決められた。

市議会の議決

宣言を行うことは市議会の議決を要するものではないが、この頃、市議会側から非公式に「今回の宣言は市議会の議決を得るべきでは…」との話があり、内部で、宣言について市議会の議決を得るかどうかが議論された。

この会議の中で、私は「市議会の議決を得ることは法的には可能であるが、地方自治法第九六条では市議会の議決を要する事項は制限列挙されていることから議決事項は限定的に考えるべきであって、今回の宣言について市議会の議決を得ることは適当でない」旨主張したが、全員しばらく沈黙のあと、舩橋市長が「これについては市議会の議決を得ることにしよう」と言われ、市議会に提案し議決を得て宣言することとなった。

当初は、まず市長サイドで宣言文をつくり、十月十五日の自治記念日に宣言を行い、宣言に基づく具体的な施策は推進懇談会において検討することとし、それらの施策を実行するための予算の段階で市議会の審議を求めるという手順であったが、「宣言を行うかどうか」という段階から市議会が関与することとなり、当初の作業の手順が大きく変わることとなった。

しかし、今まで「マイカー拒否宣言」や「健康都市構想」など、歴代市長の下でいろんな宣言や構想が打ち出されたものの、いずれもその市長が代わればそれまでというケースがほとんどであるが、市議会の議決を得ることによって、市議会も含めて「京都市総体として意思決定をした」ということになり、この宣言が、その後何代もの市長が代わろうと今なお生き続けているのは、この時の舩橋市長の英断によるところが大きいといえる。

「趣意書」と「推進懇談会」

その後、八月四日の市長記者会見で、趣意書を発表し、自治八〇周年にあたる自治記念日に宣言を行うことや、宣言文の起草や宣言に基づく具体的な取組みを協議する機関として、桑原武夫氏をはじめ学識経験者や経済界の方々十二名で構成する推進懇談会を設けること等が発表された。

市議会（委員会・本議会）での論議

八月十九日に市議会の総務委員会が開かれ、宣言の構想について論議がなされた。

議員から、推進懇談会のメンバーについては「政治的意図を感じる。幅広い市民の代表、各会の代表とはいえない」「メンバーの人選をやり直すべき」といった意見が出され、構想については「具体的な構想が明確でない」「市民生活との関連はどうなのか」等々の意見が出された。

また二九日に開かれた本議会では「この構想は舩橋市長三選への意欲の表れか」との質問があり、舩橋市長は「この構想は五〇年、一〇〇年先を考えた半永久的なものであって、私の任期が三年、四年永かろうと短かろうと問題ではない」と否定された。

さらに九月七日に再び総務委員会が開かれ、議員から「宣言をどのように進めていくのか、宣言案と同時に具体的な中身を示すべき」との意見が続出した。

「推進懇談会」からの草案

八月三〇日に推進懇談会の第一回会合が開かれ、桑原武夫氏を座長に選んだあと、舩橋市長から宣言文の草案づくりが委嘱された。

各委員からは主として宣言文の草案づくりに関する意見が出され、これらの意見をもとに桑原座長と梅原氏に宣言文の草案をつくっていただくことになった。

その後、九月十三日の二回目の会合では、提出された宣言文の草案について了承され、十八日の三回目の会合においてこれを正式決定し、桑原座長から舩橋市

京都新聞
「世界文化自由都市」づくり
京の遺産、積極活用
舩橋市長が構想
まず留学生施設
近く諮問委など任命へ
1月

京都新聞（1978年1月1日朝刊）

長に宣言案が手渡された。

舩橋市長は「立派な宣言案ができたことを心から感謝する。市の将来の方針にかかわる大きな問題であるので、市議会の承認を得たうえで宣言したい。宣言に基づく具体的な取組みについては幅広く市民の声を反映していきたい」と述べた。

再び市議会での論議

九月二一日に開かれた本議会において「世界文化自由都市宣言」が議案として上程され、舩橋市長の提案説明のあと、議員からは「果たして京都市が世界文化交流の中心になれるのか」「過去にも何度か宣言が出されたが空文化している。今回もそのおそれがあるのではないか」等々の質問があり、これについては舩橋市長の答弁のほか、特別説明員として梅原氏が宣言文に盛り込まれた精神について、約二〇分にわたり熱弁をふるわれた。

この日は約三時間にわたって論議が行われ、議案は総務委員会に付託されることとなった。

付託された総務委員会では二九日に委員会が開かれ、議員からは「将来の具体的な計画を示すべき」との意見が相つぎ、急遽、今までの推進懇談会で俎上に上がっていた国際交流のための施設の建設など、七分野十七項目にわたる計画をまとめ、十月二日から二日間にわたって開かれた同委員会の市長総括質疑において、この計画案を提出した。

その後、市議会では各会派の意見調整が難航し、十二日になってようやく委員会が開かれ、賛成多数で原案通り可決されたが、九項目の付帯決議がつけられての可決であった。

こうした経緯を経て、翌十三日に開かれた最終本会議において原案通り可決されたが、宣言を予定している自治記念日の、まさに二日前という状況であった。

京都市自治八〇周年記念式典において宣言

十月十五日に行われた京都市自治八〇周年記念式典において、舩橋市長が宣言文を朗読され、そのあと桑原座長が「世界文化自由都市宣言について」と題して宣言の意義を講演され、ようやく宣言の実現をみた。

当日、式典の出席者に、宣言文と「宣言にあたって」と題する舩橋市長の挨拶文が掲載されたパンフレットが配られたが、この舩橋市長の挨拶には宣言に対する当時の京都市の熱い思いや決意が込められており、これを掲載する（次頁）。

おわりに

その後、宣言に基づく具体的な事業の検討作業は文化観光局が所管することになり、私はこの業務から離れることとなった。

今年は宣言が行われてから四〇年を迎えるが、この宣言が京都市の施策の上位理念として今なお生き続けていることは、宣言に至るまでの作業に携わった者として大きな喜びであり、非常に感慨深いものがある。

※「世界文化自由都市宣言」の具体的な政策は、機関誌『藝文京』一三四号（二〇一七年九月発行）に掲載しています。

※『市民のまち京都（京都市自治八〇周年記念）』（一九七八年十月十五日 京都市広報課発行）に、舩橋市長と桑原武夫氏の対談「二一世紀への〝まちづくり〟世界文化自由都市構想」が掲載された。

北田貞雄　元京都市職員。「世界文化自由都市宣言」を行うにあたり、宣言に至るまでの作業に携った。

宣言にあたって

現代の社会は、精神的価値の喪失、自然の破壊など多くの困難な課題を抱えて、苦悩のなかに新しい方向を模索し、二一世紀へ向けてどのように生きるべきかの選択を迫られております。

このような状況のなかで、将来の京都市のあるべき姿を考えてみますとき、現実的な諸問題に対し積極的に取り組むことはもちろんでありますが、長期的な展望に立った、二一世紀への都市づくりの基本理念ともいうべき理想を持つことが必要であると考えます。

御承知のように、京都は、明治以来、先人の努力により、数多くの大きな業績を残してまいりました。

また、戦後は、昭和二五年に京都国際文化観光都市建設法が制定され、以後は、「国際文化観光都市」として、文化観光資源の維持開発や施設の整備などを中心とした都市の建設に力をいれてまいりました。例えば、文化や伝統、自然などを守る施策としましては、京都市のまち全体の調和を図るための景観保全対策、能、狂言などの伝統芸能、祇園祭、五山送り火など世界に知られた伝統行事や数多くの文化財を守るための文化観光施策、あるいは西陣織などの伝統産業を発展させるための産業振興施策等を行ってまいりました。また、国際交流の面では、外国の諸都市との交流を深めるために、パリ、ボストン、ケルン、フィレンツェ、キエフ、西安の各都市と姉妹・友好都市の提携をしてまいりました。

しかしながら、将来の京都市のあるべき姿を考えてみますとき、伝統や環境などの貴重な文化遺産を単に消極的に保存したり、観光目的に利用するといったことだけではなく、平安京以来守り育ててきた日本文化の伝統と現在の学問の都としての環境や施設を資産として、また従来の施策を土台として、さらに積極的に、文化交流を行い、優れた文化を創造し続ける永久に新しい都市に発展させる必要があります。

古い文化遺産と美しい自然景観をもつ京都市は、このような世界の文化を交流する担い手として最もふさわしい都市であり、その役割を積極的に果たすべきであると考えます。

そこで、京都市は、市会の御賛同も得て、京都市自治八〇周年記念にあたる自治記念日に世界文化自由都市宣言を行うこととしました。

今後、この宣言に基づき、例えば、留学生の問題、姉妹・友好都市交流への取組み、国際交流のための諸施設の活用と設置並びに文化施設の誘致などの諸問題について、具体的な推進のための研究、検討を進めてまいります。

そのためには、幅広い市民各界各層のかたがたのご意見を賜わりながら、長期的に、息永く、しかも着実に、実のあるものにしていく決意であります。

今後とも市民のみなさんの御理解と御協力を心からお願いいたします。

京都市長　舩橋求己

対談
都市と百貨店―生活のデザインと文化―

井口昌也（株式会社大丸松坂屋百貨店）
米田庄太郎（株式会社高島屋）
コーディネーター：辻喜代治
（京都市芸術文化協会 調査・編集委員）

百貨店は生活の博覧会場だ！

辻　我々にとって百貨店は非常に重要な存在であるにも関わらず、日常に溶け込んでいるがゆえに知らないことが多いと思います。

百貨店・デパートが初めにできたのは一九〇四年（明治三七）年の「デパートメント宣言」をされた三越と言われています。百貨店は、大丸さん、高島屋さんのように呉服店の系列と、それから少し時代が進んでできた阪急、阪神、西武などの電鉄系のふたつの系列がありますが、共に日本の近代化に貢献してきました。たとえば我々の生活のスタイルや流行をつくる等、なくてはならない存在であり、建築は都市のシンボル的な要素もあります。

では、それぞれの成り立ちや歴史的なところをお話しいただき、そこから、百貨店の在り方や今後の展開など、いくつかご質問させていただきます。

大丸と松坂屋の歴史

井口　ご紹介いただいたとおり、大丸松坂屋百貨店は呉服商から始まった百貨店で、たいへん長い歴史を持っています。

まず、松坂屋は一六一一（慶長十六）年に伊藤蘭丸佑道（すけみち）が創業、大丸は一七一七（享保二）年に下村彦右衛門正啓（まさひら）が創業と、いずれもたいへん古い百貨店です。松坂屋が創業した一六一一年がどういう年かと言うと、この前年に徳川家康による名古屋城の建設が始まります。この時、お城の前（本町）に「伊藤屋」を設けたのが松坂屋のはじまりです。

大丸は豊臣秀吉が伏見城をつくった時に栄えた京都の伏見に、一七一七年に呉服商「大文字屋」を始めました。一七二六（享保十一）年には今の心斎橋に大きな店をつくります。心斎橋というのは当時、大阪城の三の丸あたりで非常に商業で栄えていた場所です。

大丸呉服ロゴマーク（1913年）

一七二八（享保十三）年、名古屋に店を出す時にはじめて「大丸」という名前を使い、今はあまり使っていませんが、みなさんよくご存じのロゴマークをつくります。このロゴマークは外側の「〇」が宇宙＝天下を表し、「大」という字は「一」と「人」という字で成り立っており、「天下一の商人たれ」という思いでつくられました。また、筆跡のように出ているところがありますが、ここが「七」「五」「三」になっています。本来はなかったのですが、真似をする人が増え、一九一三（大正二）年にこの形で登録意匠にします。

翌年には、伏見にあった店を柳馬場姉小路に移し、本店（仕入店）をつくり、さらに一七三六（元文元）年に京都総本店ができます。今は跡形もないのですが、当時は二〇〇〇坪（最終的には三〇〇〇坪とも）もあり、とても大きかった。今の京都店が出来た当時の三倍以上あったことになります。

それから約一八〇年間は京都が本店でした。

この他に、分店を最大時で八つ、両替商、さらには下村家の本宅が二つと、大丸は京都中にいろんな建物を持っていました。

一七四三（寛保三）年、遂に大丸は江戸に進出します。江戸店は越後屋さん、白木屋さんと並んで三大呉服商と言われるほどに栄え、一七八七（天明七）年には越後屋さんを抜いて売上日本一の呉服商になり、発展を続けます。

三つの転換期―大丸と松坂屋と歴史

井口　私は長い歳月の中で、百貨店（呉服商）には大きな転換期が三回あったと思います。

まず一回目の転換期は松坂屋の創業期、一六一五（慶長二〇・元和元）年だと思います。これは「大阪夏の陣」があった年で、大阪城が燃え、豊臣家が滅び、そして徳川が天下泰平の時代をつくります。呉服商の発展というのは、戦国時代の終わり、要するに平和の始まりと共に生まれたと思います。江戸時代が始まるまで、本当に苦しい時代がありましたが、これ以降大きな戦争はしばらくありません。この時期から松坂屋をはじめとして次々と老舗百貨店が生まれました。長い戦争が終わって、鎧を服に替えた時なのです。平和と共に百貨店は生まれ、発展してきたのです。

江戸名所大伝馬町大丸呉服店の図（1743年）

二つ目の大きな転換期は、新選組も関わった一八六七（慶応三）年の大政奉還の年で、明治の近代化、西洋化の影響が大きく、これを境に呉服商を続けていくことが困難になっていきます。

新選組が大丸で羽織と袴と一重（ひとえ）をつくり、高島屋さんで旗印をつくった、という有名な話がありますよね。百貨店というのは、歴史的な境目、時代の最先端やトレンドと交差してきたのだと思います。

三つ目は高度経済成長の時期で、これは後でお話しします。

大丸の建築

井口　一九一二（明治四五・大正元）年。大丸京都店はインド・サラセン式、鉄筋木造

大丸京都店 インド・サラセン式全景図(1912年)

三階建ての百貨店として生まれ変わります。当時、まだ江戸時代の雰囲気を残している明治の頃に、この建物が忽然とでてきた（笑）。サラセン式の建物って日本中探してもほとんど見当たりません。この様式はタージ・マハルと同じなのですが、これを京都につくろうと！大丸の決死の想いが伝わってきます。残念ながら十年後には燃えてしまうのですが、これが烏丸にある大丸百貨店の一番初めです。

この後、京都店は一九二八（昭和三）年にウィリアム・ヴォーリズの建物になります。つい最近（二〇一五年）まで南側壁面はこの時の面影を残していました。

大丸というイメージを決定づけたのは、ヴォーリズの建築と、クリスチャン・ディオールやジバンシーのファッションではないでしょうか。これは海外ブランドを専属販売するという、日本初の試みでした。

高島屋の歴史――外国向け商品を展開

米田　高島屋は一八三一（天保二）年、飯田新七（しんしち）が京都烏丸松原で創業しました。

本家の米穀商飯田家が、近江国高島郡出身であることから屋号を「高島屋」としていたのにちなみ、初代新七も「高島屋」を屋号としました。すぐ横の因幡薬師さんの石灯籠にはマルタカのマークが残っています。

明治に入り天皇が東京に移られ、京都がまだ復興途中の頃に、大きな出来事がありました。一八七七（明治十）年に大阪～京都間に鉄道が開通し、京都に外国人がやって来て、一回目のインバウンドが始まります。

茶葉を買いに来ていたアメリカのスミス・ベーカー商会が、一八七六（明治九）年に高島屋に寄って袱紗（ふくさ）を山のように買って行ったことを契機に、高島屋は外国人向けの美術織物に着手します。一八九三（明治二六）年に「シンシチ・イイダ高島屋シルクエンブロイダリー」という貿易専門店をつくり、刺繍を中心に販売しました。おもてに人力車がありますね。京都駅からまっすぐ高島屋へ来て、お買い物をされる、そういう商売をしていました。

ここで販売されているのはただ日本風のものというのではなくて、すべて外国人用にデザインされたものです。一八八二（明治十五）年から京都の日本画家を集めて下絵をつくり（一八九四年には画稿室を設置）、西陣で染め、刺繍したものを販売したのです。

シンシチ・イイダ高島屋シルクエンブロイダリー

高島屋 初めてのショーウィンドー(1896年)

また、それまでは日本に来る外国人に売っていましたが、博覧会に出して海外でも売るようになります。たとえば、山元春挙の「ロッキーの雪」、竹内栖鳳「ベニスの月」、都路華香の「吉野の桜」と、世界三景「雪月花」のタペストリーをつくりました。

一八九六（明治二九）年にはショーウィンドーでオープン陳列の販売を始めます。今の販売方法がこの時にもう始まっているんです。

もうひとつ高島屋にとって大きな出来事がありました。一八八七（明治二〇）年から宮内庁の御用で壁掛け、壁飾り、天皇旗など注文いただき、また伊勢神宮の式年遷宮などの注文をいただきました。高島屋はこういった事業にも取り組んでいきます。

鉄筋コンクリートの建築――下足の廃止

米田　烏丸通の道幅が広がり、一九一二（明治四五）年に烏丸の西に日本初の鉄筋コンクリートで百貨店をつくります。大丸さんはすごいオリエンタル調の建築ですが、うちは屋根瓦をのせて黒い壁にして、土蔵造りのまじめなおとなしい百貨店です。大丸さんみたいに奇抜なことはいたしません（笑）。この建物は一九五三（昭和二八）年に、そのまま居抜きで京都銀行本店になります。

一九二七（昭和二）年には烏丸店は下足を廃止しました。それまでは下駄を脱いで下足札をもらってお店に入っていたんです。ところが道がアスファルト、コンクリートに整備されて、履物のまま入れるようになりました。

また、この頃から女性進出の場として百貨店が注目されるようになります。まちの中で女性が働ける場所が百貨店だったんですね。

建物の拡張と取扱商品の拡大

米田　大正時代には新京極が栄えはじめ、高島屋は四条通に小さなお店をふたつ出します。ひとつは「十銭均一ストア」。もうひとつは「高島屋グロッサリー」です。一九三二（昭和七）年にかなりおしゃれなデザインで打ち出しており、これも高島屋のひとつのアイデンティティです。その後、四条河原町にマーケットセンター、はじめて蛍光灯を使い間接照明で照らしたパールセンター、

上：大丸京都店 ヴォーリズ建築外観(1928年)
左：高島屋 因幡薬師の灯篭に残るロゴマーク(1857年)

下足の廃止は非常に大きな変化だったと思います。関東大震災の後、人をすみやかに避難させ、また足元の怪我を避けるために、靴のまま店内に入るというスタイルになっていったとも聞いています。

次にショーウィンドーや商品を見せて売ること、「値札」に値段を表示して売る、ということも大きな変化だったのではないでしょうか。このあたりから、近代的な、デパートの販売方法になったようです。

百貨店の役割――文化催事から美術展へ

井口　文化催事というと、今は美術展を想像されると思いますが、大丸は当初、展覧会をあまり多くやっておりません。一番初めは一九一〇（明治四三）年、大丸京都店ができる前、今の敷地が更地の状態のところで「大丸ガーデン」という催しをしました。この「大丸ガーデン」と東京店の「時代服展覧会」、このふたつが歴史上の最初の催事じゃないかなと思います。夜店と物販がセットになったようなものを五〇日間開催しました。実はサラセン式の京都店をつくるかつくらないか、すごく悩んでいた時期があって、つくらないという選択もあったのですが、この頃はなかなか外に出てこなかった京都のご婦人方が、「大丸ガーデン」に毎日のように来てくださり、その盛況をみて、京都店をつくる決断につながったと言われています。つまり、大丸京都店より先に催事があったとも言えますね（笑）。何を売っていたかというと、銘仙（絹の着物）、浴衣、それから食べ物や飲み物の販売、ローラースケート場や舞台で音楽の催しを、夜の六時くらいからやっていました。

米田　高島屋は催事が大好きで、北海道展など、各地の物産展も早くに始めます。今みたいにスイーツはありません。この頃はまだ物産協会などありませんので、漁業組合や農業組合に行って交渉し、新巻鮭やジャガイモ等、保存の効くものを集め貨物

高島屋「現代名家百幅画店」
『新衣裳』92号（1910年1月発行・高島屋）

公楽大劇場等、次々に拡張していきます。

一九五一（昭和二六）年頃、一階のフロアには舶来品が並んでいました。昭和二〇年の終戦の時に進駐軍が入り、外国人向け商品の販売スペースを提供しろということでしたが、この頃から一般への販売許可がおり、皮製品やスカーフなどを販売していました。今でも百貨店の一階というのは、こういった商品を扱うことが多いです。

一九五六（昭和三一）年には七階建てになり、屋上に遊園地、最上階に「お好み食堂」ができます。

また、店内に施されたクリスマスの装飾に憧れて、ご家庭でもクリスマス装飾をするようになっていきます。これは百貨店が提案する暮らしのデザインが、各家庭に広がっていった、よい例ではないでしょうか。ちなみに、大丸さんはディオールでしたが、高島屋はピエール・カルダンです。こういった棲み分けもできておりました（笑）。

辻　過去から現在までの変遷をお話しいただきましたが、いかに我々の生活と関わっているか、また時代の変化とともに歩んできたことがわかりました。

列車に乗せて運んでいました。たいへん手間のかかる作業ですが、やっぱり高島屋は催し物が大好きなんですね。儲けを度外視してとことん催し物をする、というのが高島屋のやり方です。

辻　京都では国立博物館が一八九七（明治三〇）年、京都市美術館は御大典記念の一九三三（昭和八）年、現・京都国立近代美術館はオリンピックに併せて一九六三（昭和三八）年にできましたが、それまではやはり百貨店が美術館に変わる施設でした。

米田　高島屋では一九〇九（明治四二）年に「現代名家百幅画会」を行いました。横山大観、富岡鉄斎、上村松園、竹内栖鳳、神坂雪佳など百人の画家さんが同じ大きさで一幅ずつ、百幅の絵を描いて、それを陳列販売したんです。これを契機に美術部ができました。

もうひとつ大きなご縁があったところでは、高島屋の総支配人・川勝堅一と陶芸家の河合寛次郎の仲が良かったんです。一九三四（昭和九）年に「日本新民藝品展示会」等、民藝の展示会をたくさん実施しました。

井口　二〇一一（平成二三）年の「文化勲章に輝く京都画壇十一人の巨匠たち」展は、大丸と高島屋さんが組んで、開催した展覧会です。これは、同じ会期に上村松園や上村松篁、竹内栖鳳などの画家十一人を六人ずつ（秋野不矩のみ両会場）展示しました。百貨店が連携してできた、いい例ではないかと思います。

米田　先程の川勝堅一は『三田広告研究（一九三六年）』で「百貨店は、生活必需品の小売配給以外に、有形無形に、現代生活に幸福を齎（もたら）して行く所に、普通の小売店や市場や消費組合と異なる文化的使命を有して居るのであり…此処に近代生活に於ける百貨店の存在意義が見いだされるのである」と言っています。また「…商品を陳列して販売すると同時に、有益にして興味ある新知識を販売し、心からなるサービスを添え、世界に文化的教育を施す程の意気を有し、買物をして頂き乍ら、同時に現代人の要求するところの心の糧を得させる程の抱負を持って…実現を計るところに百貨店の今一つの大使命が残されてゐる…」「…日本では、図書館、美術館、博物館等の知識的、趣味的文化設備が、まだ充分だとは云へません、…これを補ふために…」「…この街をより愉快に、より賑やかに、より繁昌せしめる事を結果として、…さうした催しを企てるのであります」といっています。

辻　これはすごい。川勝さんのこの言葉で、今日のテーマが解決してしまいますね。

特に五〇年代から六〇年代、美術館・博物館が少なかった時代、文化的な催しは、まち中の百貨店で開催されていました。日本の美術行政の遅れの中で、百貨店が果たしてきた役割というのは、非常に重要だったと思います。

井口　現在、京都は国公立で立派な美術館・博物館がたくさんありますが、百貨店ミュージアムというのは、まずは身近であるということ、暮らしの中で楽しみや励みになるものをやっていきたいと思っています。

辻　一九七四（昭和四九）年に文化庁から、デパートに国宝や重要文化財の貸し出し禁止という通達が出されます。文化財保護の問題ですね。そのために、これまでのように売り場のとなりに展示場があるというのではなしに、それなりの空間を持った美術館を、デパートもそれぞれに持つよう

井口　先程から三つの転換期という話をしていますが、今、四回目の転換期を迎えているのではないかと感じています。それがまさに、ネット社会です。

　はじまりは一九九五（平成七）年。バブルの崩壊やリーマンショックの方が、みなさん重大な事件に感じるかもしれませんが、生活スタイルを変えていったインターネット、メールの存在は圧倒的に大きいです。Windows95が出たのは、さりげないようで実はものすごく大きな事件で、リーマンショックなどが台風だとすると、ネットというのはエンドレス・レイン（終わらない雨）です。たかが雨、でも終わらない雨なんです。戦争や政権交代とかではなく、身近な生活のインフラが変った。人間の価値観、生活のデザインや文化も大きく変わっていく過渡期にある。

　ただ、このまま今の文化が消滅するのかというと、そうではない。京都は世界一人気のある観光都市に選ばれていますよね。ハイテクや技術に偏りすぎたこと、破壊しすぎたものを、逆に本来の姿、普遍的なものを京都に求めている。古いものだとか、伝統的なものだとか、本物をみんな見たくなるんです。

米田　ありがたいことに我々は「百貨店」なので何を売ってもいい。ものを売らなくてもいい。でもネットでは売れないものがある。それは見る、触る、話すなど人と接すること、体験を伴うサービスや機能を提供することです。いろいろなビジネスモデルを考えていったら、人が集う場所になる、それが百貨店かな。そこに文化の香りがする。

井口　百貨店はそういう場所になっていかないといけない。これから向かう方向には、ネット等のハイテクの発展に伴う世界としてのアニメ等のカルチャー、つまり現代の流れに寄り添って生まれてくる文化と、反動的に永遠性を持った本物志向の文化を求める動きがあると思います。このふたつに、人の心は向かって行くのではないかな。

　身近に、傍にあって大切なもの、人々が求めているものを見つけて、百貨店は変わっていかないといけない。表面的にはあまり変わらなくても、中身はものすごく変わらないといけない。そういう時期に来ていると思います。

ネット社会とデパート

辻　現在、インターネット社会で苦戦されているのでは？

井口　平和と豊かさの象徴だけに、豊かさがなくなると百貨店美術館は消えてしまいます。

辻　時流の経済状態に密接に関係していることがわかりましたが、バブル以降の一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、百貨店美術館が次々と閉鎖していきます。

井口　三つ目の転換期、一九四五（昭和二〇）年の太平洋戦争が終結し、また平和が訪れて、それが高度経済成長につながり、そのど真ん中の一九七五（昭和五〇）年に西武美術館ができるわけです。今までとどう違うかというと、百貨店が有料の絵画展を本格的にやるようになった。これは、まさに平和と豊かさの象徴だった。またこの頃、西武には堤清二さんという文化人経営者がおられて、その方が始められたことが、その後の百貨店業界全体に広がっていきます。

まちの賑わい―まちの景観

辻　先程、百貨店の特徴としてショーウィンドーを挙げました。いろんな情報を発信するスペースですが、大丸さんは路面店拡大もされていますよね。

井口　はじめ神戸居留地で展開していたことを、京都でも始めました。ルイ・ヴィトンや東急ハンズ、これから京都ゼロゲートもJFR※グループでやろうとしています。また町家でエルメスなども展開しました。特に京都の場合は、まちと一体感のある展開をしていきたい。これが今の京都店の思いです。

　京都はやはり特殊です。まちの中にきちんと入り込んで、京都の方々にきちんとつながりを持った店でないといけない。

米田　高島屋一店舗ではなく、同じ四条通の大丸さんたちと一緒になって、この地域を活性化していかないと、百貨店は残っていけないと思っています。

井口　明治時代の大丸の話しを一切しませんでしたが、なぜかというと話すことがないんです。その間、高島屋さんはいろんなことをしてこられた。かつては豪商だった大丸も、サラセン式の百貨店建てる前には追い詰められていました。それは高島屋さんと違って変われなかったから。

　まだ答えは出せていませんが、全百貨店がいろいろ考えて、最後はみんな同じような答えを出して進んで行くんじゃないかな。そうでないと取り残されてしまう。

辻　昨年、四つの百貨店（大丸・高島屋・藤井大丸・伊勢丹）と京都造形芸術大学が連携した「DEP/ART」という、ショーウィンドーを使いファッションとアートを結びつける催しがありました。京都のまちの中に催しが連なり、そこに人の集う場所ができるというのも、ひとつの方向性かな。

米田　昨年、東アジア文化都市の催しとして、京都芸術センターと二条城で大きな展覧会がありましたが、例えば京都芸術センター、大丸、高島屋と連なるように地域全体をアートのエリアにできれば、もっともっと楽しいことが出来るのではないでしょうか。地域と共に発展していく、これが百貨店の使命ではないかなと思います。

辻　商品だけではなく、人や生活スタイルをも動かしてきた百貨店。これからも、外に出かけ、体験する場として活用することで、みなさんの生活やまちの活性化につながっていくと思います。

　本日は、ありがとうございました。

質疑応答につきましては、紙面の都合で割愛させていただきます。

※JFR（J・フロントリテイリング）は大丸松坂屋・パルコなどのグループ親会社。大丸関連画像はすべて、J・フロントリテイリング史料館提供。

プロフィール

井口昌也　一九六三年大阪府豊中市生まれ。東北大学文学部美学・西洋美術史卒業後、大丸百貨店入社。一九九五年から大丸ミュージアム（梅田店）、現在は本社文化催事担当。博物館学芸員。

米田庄太郎　一九五一年京都市中京区生まれ。同志社中学・高校・大学文学部社会学科卒業。外商部、美術部マネージャー等を経て京都店店長を務め、現在は京都店顧問。地元の地域開発に取り組む。

《対談事業》
「都市と百貨店―生活のデザインと文化―」
開催日：平成三〇年二月十八日（日）
　十四時～十五時三〇分
会場：京都芸術センター講堂
主催：京都市、公益財団法人京都市芸術文化協会

機関誌『藝文京』のテーマに沿って行ってきた対談を、今回初めて一般公開で実施しました。今後もご注目ください。

事業紹介

会員交流・発表サポート舞台事業

京の文化絵巻２０１７～文学吟詠舞劇と邦楽の飛翔～

平成二九年八月十二日、協会会員及び市民が交流する機会として二部構成の舞台が開催された。先ず、文学吟詠舞劇「智恵子抄断章―千鳥と遊ぶ智恵子」（原詩：高村光太郎／構成詩・付曲：廣 青龍　舞振付：藤蔭静樹）が演じられた。出演は廣 青龍、増田松洲、栗田瀞恵、村田青雪、黒田桜風、松浦哲山、舞 藤蔭静樹、藤蔭静亜樹の各氏であった。

高村光太郎は九十九里浜で「犬吠の太郎」がブリキ缶をカンカンと叩いている姿を詩に書いた。旅芸人の一団で、やがて去って行く彼ら、バカにされている太郎、まだいたいけな娘芸人に智恵子との出会いを重ねて詩にした。舞台はブリキを叩きつつ舞う哀愁をおびた姿、舞台わきではいんいんとした吟詠と、会場は満員でみな迫力ある舞台に見入った。

光太郎と智恵子は恋人の間柄になり、結婚へと進み、よくある若者の経済的な苦しみに耐えながら芸術活動をしたが、突然、智恵子は昭和六年八月に発病した。

光太郎は智恵子を九十九里浜の療養所に入院させる。次第に手の付けられないほど荒涼の世界へ行く智恵子を看ながら、自分の生命をかけて詩を書いた。

京の文化絵巻2017～文学吟詠舞劇と邦楽の飛翔～
日時：平成29年8月12日(土)15:00−16:15
会場：京都芸術センター講堂
入場料：1,000円

松の花粉が舞う九十九里浜の智恵子を、舞台で独り舞う姿に、海鳴りや風や光を想像することができ、廣 青龍の吟詠の響きを聞き入った。

―人間をさらりとやめて天然の世界へいってしまった智恵子の姿、二丁も離れた防風林のなかで松の花粉を浴びながらいつまでも立ち尽くす光太郎―　千鳥がチチチチと鳴く。光太郎 光太郎と呼びながら消えていく智恵子。　という吟詠舞劇だった。

二部は古典芸能中の十八番と言われる道成寺ものより「古道成寺」が演奏された。

解説は大木冨志、「三味線音楽は地歌が元であり京都で生まれたこと、江戸時代の庶民の娯楽で、祇園町の井筒屋の岸野治郎三さんがいろいろの曲を作り、古道成寺もその一つ」で、祇園で忠臣蔵の主だったひとが遊び、こころの内を隠して地歌に酒にと過ごしていた時代、松尾芭蕉も旅と文学に命をかけていた等現代の暮らしには遠くなった古典音楽、文学、そして庶民の娯楽を知らされた。

箏　早瀬久恵、歌・三絃　大木冨志、栗田彰輝、梶田和栄の各氏による演奏は忙しい現代の暮らしから離れて心に沁みる一時であり異次元ともいえる江戸時代の文化を垣間見ることが出来た。

（名古きよえ）

※「京の文化絵巻」は、会員が分野を超えて交流し、互いに刺激し合うことによって新たな芸術文化の創造と発展を図るとともに、更なる芸術文化の普及・向上を目指しする、平成二九年度からの新規事業です。今後のプログラムにもご期待ください。

花道

白川 淑

花いかだが　流れてくる
はらはら　はらはら　舞いながら寄ってくる
しぃんと　音もなく
浄土寺橋の東づめあたり
水面(みなも)は　ももいろの絨緞になっている

ほれ　みとおみ　きれえな花道え
いっしょに　歩いてみとうなってくるしぃ
そやけどぅ　やっぱり後(あと)まわしにしとこ…
ひとりで　さいなら　するときまで

まっすぐ東へいくと　銀閣寺
見上げると　大文字山
ここ　うちらのすいばやったのに
このごろ　たんとの人がきはるなぁ

はなびらの散る　今じぶんにのこしとこ
ふわふわ　ふわふわ　花の小径を歩きながら
耳をすますと　お琴や尺八のすずしい音色(ねいろ)
さくらさくらの唄も　聴こえてくるしぃ

京都の日々

岩井 洋

綿パンの上に汚れた実験着を着て
研究室から先輩は出てきた

下宿を探してるのですが
私がそう言うと
大学からほどない家を訪ねることとなった

そこにはもう一人の先輩がいて
ここは今空いてないな、と言って
心当たりの下宿を紹介してくれた

疏水沿いの道に出ると、桜の花が咲きかけていた
ここは哲学の道と言うんだ、と先輩が言って歩いて行った
法然院のたもとに行くと用件を忘れ寺に向かった
もうすぐ青いもみじの葉に蔽われ、参道が美しく映えると言う

大文字山に登ろうか、この街を一望できる
先輩の言葉にうなずいた

こうして私の京都の日々が始まった

歌人 岩田晋次氏を偲んで

廣　青隴（詩歌・小説）

昨年十一月、岩田氏の訃報を受けたとき、私は耳を疑った、病気ではあったが、その少し前まで交流し、「自分は今、万葉論を自分の歌誌『紫折戸』に連載しようと思い書き始めた」と伝えてくれていた。そして私からも「体調が回復したらもう一度、短歌と人生の関係の講演を二人でしよう」と話していたのであった。「もう一度」といったのは、二人は曽って京都教育文化センター大ホールにて、京都ペンの会と京都市詩吟文化連盟主催の「京都文化祭典二〇〇九参加 文化講演会」の講師となり、それぞれの短歌観に立って「哲学者西田幾多郎の短歌と朗詠」の話をしていたからであった。

実はその講演会には定員五〇〇席がほぼ満席の中に、西田哲学研究の大家上田閑照京都大学名誉教授や同哲学界の小川侃名誉教授もおられ、後日上田先生から西田短歌の朗詠について「まさに六大響ありの響き、私の身心に響き入り、今も響いております。その響きは私の心を深くしてくれています」（原文のまま）、とのお手紙を頂いたので岩田氏にも伝え、喜び合ったのである。

実はそれまで文法中心の客観的解釈論に立っていた彼も、その「六大響」的鑑賞にウナリを挙げ、自分の立場の発展を意図したはずであった。

彼が短歌を学んだ師、田中順二は『ハハキギ』の主宰者であり、その『ハハキギ』には大正十五年に西田幾多郎が歌論を寄せている。

「我々の身体は我々の生命の表現である。泣く所笑う所、一に潜める生命の表現ならざるはない。十七文字の俳句、三一文字の短歌も物自身のもつ真の生命の表現に外ならない。」と述べており、西田は風景詠でも生命の燃焼として歌っているのであった。

岩田氏と私の短歌論の違いも、その文化講演会での効果を通して接近していくのであるが、「もう一度」と願った真意も、現社会での短歌や俳句壇への新しい起爆点を示したいという心にあった。

彼は私以上に短歌にかける情熱は高く、また高校国語教師のプライドにかけてよく勉強していた。京都市芸術文化協会が、その前身の文団懇から発展して創立されたときも、若くして機関誌『藝文京』の創刊から第三五号までの長きにわたり、その編集のなかの表紙写真に掲載する京都史蹟と先達歌人の関係を調査して連載し、芸文協の文化的格調創りに努めていた。また刑務所に受刑入所した人々に短歌を永年指導したり、今は京都の名物行事となっている城南宮での「曲水の宴」も、彼の長い協力によって発展している。私が今は亡き詩人の人見東陽氏より求められて、上賀茂神社での曲水宴の、再興に当たったときも、彼は関心を示していた。

酒が好きで、呑むと楽しく「桃花流水」の世界を求め、李白のようなところもあった。もし今も元気であったなら、私は心から酒を酌み合い、于武陵の詩「この盃を受けてくれ」の絶句を吟じて聴かせたであろうにと思う。

岩田晋次氏は二〇一七年十一月七日に八〇歳でご逝去されました。永年、調査・編集委員会をはじめ芸文協の活動にご尽力いただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

建築Symposion——日独仏の若手建築家による

京都市・長沙市・大邱広域市の三都市が、様々な文化芸術イベントを実施した「東アジア文化都市二〇一七」。そのプログラムの一つ「アジア回廊現代美術展」の会期に合わせ、京都芸術センターのグラウンドで「かげろう集落〜日独仏の建築家が提案する小さな公共空間群」（八月二十六日〜九月三日）を開催しました。設計を担当したのは、日独仏の先鋭の若手建築家六組。監修には、「アジア回廊現代美術展」アーティスティック・ディレクターでもある京都芸術センター館長・建畠晢の推薦により、建築批評家の五十嵐太郎を迎えました。六月にドットアーキテクツの家成俊勝による地域へのリサーチ、そして参加建築家たちと五十嵐によるキックオフシンポジウムを実施し、その後ミーティングを重ねながら設計を行いました。マスターアーキテクトとしてドットアーキテクツが設営を主導し、建築ボランティアの協力も得て、一つの空間を創り上げました。

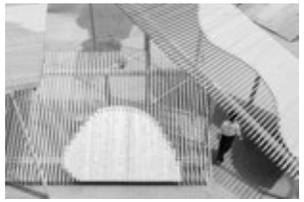
京都芸術センターは、町衆の寄付によってつくられた下京三番組小学校（明治二年開校）、明倫小学校（平成五年閉校）を経て、平成十二年に明倫小学校の建物をほぼそのまま残してオープンしました。グラウンドは今でも、地域住民の運動スペースとして機能する一方、多くの人が訪れる公共空間でもあります。シンポジウムでは、リサーチにより明らかになった地域コミュニティの現況や要望の報告がなされ、日本における公共空間を考えたとき、海外のパブリックスペースに比べて多くの「禁止事項」があることが話の主軸となりました。ただ、今回は九日間の会期という制限があることで、通常の公共空間よりも素材やデザイン面の選択肢が広がるのではないかという意見もあり、より自由で制約の少ない、新しい概念の公共空間を生み出すということを軸に、プランを練りました。

「かげろう集落」全体風景

五十嵐が「かげろう集落〜日独仏の建築家が提案する小さな公共空間群」と名付けた空間では、日々、様々な建築物の使い方が来場者によって生み出されました。ジャングルジムのような「危ない遊び場」（スヴェン・プファイファー）は、遊び場にイベントステージにとその日によって姿を変えました。急な斜面が特徴の「屋根滑り廊下で昼寝」（島田陽）や「町家の滑り屋根」（ドットアーキテクツ）では、大人も子供も関係なく走ったり登ったり滑ったり。ホースが回転しながら水を撒く「散水塔」（ドットアーキテクツ）は、真夏のグラウンドに涼をもたらしました。「形のない悦楽のフロート」（ルードヴィヒ・ハイムバッハ）は、狭い空間が子供たちの隠れ場に。屋根の下に椅子を設置した「フォリー、ウェルカミングルーフ」（セバスチャン・マルティネス・パラ／バンジャマン・ラフォール）は、地域の人や大人たちの憩いの場となっていました。南北二つの建物の屋上をテープでつないだ「人々をこの場所を織りこむ、落書き」（加藤比呂史）は、テープによる影や風に揺られる音を空間全体に生み出し、生木を活用した「京雑草の庭」（加藤比呂史）と共に、グラウンドを「かげろう集落」として一つの空間にまとめ上げました。また、五十嵐をはじめとする建築家たちの「公共」という問いかけに対し、主催者である京都芸術センタースタッフも、「かげろう集落」でのふるまい方やイベントの企画など、試行錯誤する日々でした。建築家たちによるトークイベント、地元のコミュニティダンスチーム、Kyoto Dance Exchangeによるパフォーマンス、明倫小学校の卒業生による野点の茶会。最終日は占い師が来たことで作品の一つが「占いの館」と化し、夜にはドットアーキテクツ指導のもと、「危ない遊び場」をロープでひっくり返すことで、九日間の会期を締めくくりました。

公共空間のあり方を問うところから始まった本プロジェクト。五十嵐はこの期間限定の試みについて、「恒常的な現実の空間にフィードバックできれば、まちはもっと楽しくなる」*と振り返っています。京都芸術センタースタッフも、改めて「地域」というものを、プロジェクトを通して確認することになりました。また九日間、ここに様々な立場・地域・国の人たちが集うことで改めて、アートセンターとしての使命を認識することとなりました。「かげろう集落」自体は既に解体されましたが、会期中に見えてきた新しい公共空間の可能性を、これからどのように実現・発信し、地域に還元していくのか、今後も考えていかねばなりません。

＊五十嵐太郎「五十嵐太郎の先読み編集局」、『建築ジャーナル 10月号』、2017年10月、26頁。



右写真：（手前作品）ルードヴィヒ・ハイムバッハ「形のない悦楽のフロート」、（中央）島田陽「屋根すべり廊下で昼寝」、（上部）加藤比呂史「人々をこの場所を織りこむ、落書き」

上：セバスチャン・マルティネス・パラ／バンジャマン・ラフォール「フォリー、ウェルカミング・ルーフ」
中：ドットアーキテクツ「町家の滑り屋根」
下：スヴェン・プファイファー「危ない遊び場」

photo by OMOTE Nobutada

報活①告動

短歌

奉祝 御在位30周年記念「重陽節会」

「瑞日祥雲齋月光風　真森」

「あらためて賀状眺めて気遣ひのぬくもり抱く春陽差しかな」

「お内裏の御簾の奥処に裳裾引く影こそ幼日ゆめの思ひ出」

「瑞日祥雲」と細字で書かれたお茶掛けの文字が清々しい。しかも温かい心が通います。おなじみの人々の笑顔にほっとご和むひと時は新年を祝う白梅一輪牡丹一枝の薄紫の優しい彩づきに楽しい会話も弾みました。少しも堅苦しくない和歌俳句会がそこにあります。娘達との交流、友人達との会話は人生の貴重な学びとお互いへの労りがあふれて居て、和風の部屋一杯に往古からの和歌誂諧の集いが生まれ顕われて来ます。居並ぶ書輩の一言、一輪も再会の人々の懐かしみ語り合う姿でございます。山茶花美術館の明るい文字と絵画。昔と今と混同見紛がう雰囲気がそこここにあふれて居て不思議なひと時でもございます。

淡く差し込む障子の光を陳列棚の照明の中に、今も昔も変わらぬ優しい心遣いにあふれて居て遂々に時間を忘れてしまいました。「人日」「雛祭り」「端午」「七夕」「重陽」といつでもお逢いいたしましょう。

西島真森（山茶花社家元）

昭和五〇年の結社以来、書・華・茶・和歌をとおして日本の伝統文化を総合的に紹介する山茶花社では、「人日」「雛祭り」「端午」「七夕」「重陽」等、四季折々に歌会・書展・茶会を開催されています。この度は、天皇御在位三〇周年記念「重陽節会」の様子をご報告いただきました。

報活②告動

俳句

京都俳句作家協会創立60周年記念祝賀会

京都俳句作家協会は、昭和三三年に、当時京都に基盤を置いて活動していた俳人が集まって創立された。結社や師系の枠を越えて、闊達に論じあい、吸収し合う会として発足したと仄聞している。以後、その理念を継いで今日まで活動がなされてきた。

平成二九年はちょうど創立六〇周年に当たり、九月十日（日）、ホテル京阪京都グランデ「光林の間」にて祝賀会が開かれた。出席は六九名。辻田克巳会長から「俳句に向かう厳しい姿勢、弛まぬ努力は、自分のためだけではなく集団のためにもなる。京都俳句作家協会という存在をもっともっと多くの方に知って貰えるよう力を尽くしたい」と挨拶があった。印刷所への感謝状贈呈、記念俳句大会の表彰と続く。大会賞は、服部友彦、岡田政信、浅井陽子の三氏が受賞した。和やかに会食が進み、宴もたけなわになったところで、石見神楽の祝演が始まる。京都造形芸術大学の学生サークル「京都瓜生山舞子連中」による熱演「塩祓い」に見入り、「恵比寿」では福々しい恵比寿様が各テーブルを廻ってくれて大いに湧いた。慶賀の雰囲気も最高潮に達したところで、岩城久治副会長の挨拶をもって目出度くお開きとなった。

前田攝子（京都俳句作家協会）

■編集後記

今回開催した「都市と百貨店」の対談には、多くの人が興味をもって参加していただいた。私のこれまでの生活にも、百貨店のさまざまな記憶や体験がある。

記憶では、幼少期の大阪のターミナルでの、地下からの匂いが、今でも忘れられない。百貨店の食料品と地下の雑踏が入り交じった独特の匂いは、当時の私にいつも夢を感じさせてくれた。まれに親が連れて行ってくれる百貨店では、常とは違った服を着て出かけ、おもちゃ売り場や屋上の遊園地で楽しい時間を過ごした。運が良ければ階下の大食堂で「お子様ランチ」にもありつけた。

その後、百貨店は徐々に日常的な空間になり、体験の場となった。七〇年代の大学時代、まだ美術館が少なかった。代わりに百貨店がその役割を担った。当時の恩師や現代作家の作品が、百貨店の売り場の一角の特別会場で展示されていた。特に京都の百貨店では、美術界を先取りした作品が展示されていたように思う。

八〇年代になると現代美術が注目され始めたが、まだそうした作品を見せる美術館はあまりなかった。そのような中で東京の西武美術館は、現代美術の展覧会を積極的に企画していた。売り場とは別に本格的な美術館機能を備え、ショップや関連図書も充実したそこは、東京の私の聖地であり、多くを学んだ。

その後、仕事の関係で今度は、百貨店の展覧会を企画する側に回って、その裏方を体験することになる。現在では百貨店の、店舗デザインにかかわる仕事もしている。このように、私の生活には常に百貨店があった。しかし昨今、大きなショッピングセンターの台頭やネットショッピングの拡大によって、百貨店は大変苦戦している。特に若い人の百貨店離れが著しいという。

しかし京都を発祥の地とする二つの百貨店は、これまで市民との深い信頼の上に成り立ってきた。いいかえれば地域と密接につながった文化装置でもある。今回の対談は、生活に直結する文化の入り口として、今一度、百貨店の存在を考えるいい機会となった。

（調査・編集委員長　辻 喜代治）